

## I 研究総括

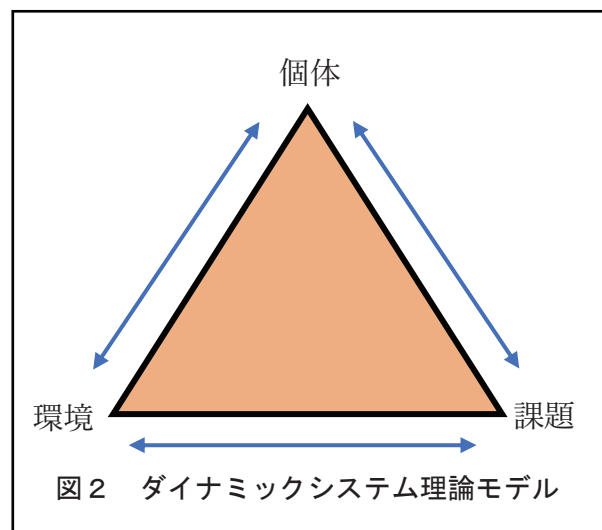
4年間の取組の結果、「学部ごとの支援の方向性」「5つの支援の視点」を踏まえ、本人を中核に置いた「自己管理のための3要素」を取り入れた実践をしていくことが『「こころ」と「からだ」の健康を主体的に考える子供の育成』につながる本校における健康教育の在り方として整理された。



本研究の最後に、特別支援学校における児童生徒の健康的行動の発達にはどのような因子が関係しているのかを示すスキームを構築することを目的として、ニューウェルのダイナミックシステム理論モデル（ニューウェル, 1986）（図2）を用いて、本研究を通して得られた示唆の総合的な整理にアプローチする。ダイナミックシステム理論（エスター・テーレン, リンダ・スミス, 2018）とは、人間行動の発達プロセスで生じる変化や創発のメカニズムを関連する複数要因の相互作用から明らかにしようとするものである。ニューウェルのダイナミックシステム理論モデルでは、人間が何らかの成長を試みる場合、「個体」「環境」「課題」の3因子とそれらの相互作用を調整・改善することで成長が促されるとしている。

まず「環境」への働き掛けとしては、教師の共通認識（学部の方向性、5つの支援の視点、自己管理維持の3要素）、健康的行動を実行するための場面設定、支援ツールの用意、家庭との連携などが考えられる。次に「個体」への働き掛けとしては、児童生徒の体調や気分をよく観察しそれに応じた対応、健康的行動への動機づけ、自己管理スキル支援などが考えられる。そして「課題」への働き掛けとしては、健康に関する認知的学習、発達段階に応じた課題の提示、生活文脈や実態に即した調整、実行機能の認知トレーニングなどが考えられる。

本モデルはあくまで、本校の研究から見出された試案ではあるものの、本モデルを用いることでそれぞれの因子内での内容決定や相互作用に教師がアプローチし、児童生徒の実態に合わせて因子間のバランスを整えていくことが、健康的行動の発達の変化や創発につながると捉えることができる。



## II おわりに

今後より深めていく必要がある課題も確認された。それらの課題について、2点述べておきたい。

第一に、実行機能に焦点を当てた指導の在り方である。後期研究で取り組んだ際、児童生徒の健康的行動の支援効果をより高めていくためには、日頃から計画や行動修正、行動目的の記憶の維持、注意の抑制などの実行機能に焦点をあてた認知機能学習や行動の支援が必要になってくると思われた事

例が散見された。このような実行機能に焦点化された指導の工夫をどうするかを、個別の指導・授業論だけでなくカリキュラムマネジメントも視野に入れて考えていくことは今後の課題であろう。

第二に、連携を効果的に指導に活用する方法の検討である。本研究の中で学校と家庭の連携が健康的行動に好影響を与えた事例がいくつかみられた。これは個を取り巻く環境要因同士（学校―家庭）の相互作用の結果が対象児童生徒の指導に強く働いていた可能性が高いと考えられる。Bronfenbrennerは、生態学的システム理論のなかで、個の関係（マイクロシステム）とともに、それらに直接影響を与えるメゾシステムの影響・相互作用による発達を重視しており、それは本研究でも当てはまる。ただし、彼らの健康状態に影響を与える要因は、学校・家庭・対象児童生徒・教師だけで語りきれない部分も大きく、これらを取り巻く様々な要因も考慮していく必要がある。他の地域社会資源も含め、学校との連携を指導にいかに効果的に活用するかを考えていく必要がある。これら課題について今後も日々の取組の中で検討を重ねていく。

本研究は「一人一人の健康課題に応じた授業実践を通して、効果的な支援方法を検討し整理することで、本校における健康教育の在り方を明らかにする」ことを目的に取り組んできた。多くの実践の中で得られてきた示唆をもとに、これからも本校の健康教育の在り方について深めていきたい。

#### 【参考・引用文献】

- ・橋本創一(2020). 知的障害・発達障害児における実行機能に関する脳科学的研究ープランニング・注意の抑制機能・シフティング・ワーキングメモリ・展望記憶ー. 福村出版
- ・U・Bronfenbrenner (1996). 人間発達の生態学ー発達心理学への挑戦ー. 川島書店
- ・エスター・テーレン, リンダ・スミス (2018). 発達へのダイナミックシステムアプローチー認知と行為の発生プロセスとメカニズムー. 新曜社
- ・宮原育英(2017). 発達性協調運動障害ー親と専門家のためのガイド. スペクトラム出版